

特集：多様な端末と大規模学習データが拓く新たな学習支援環境

小集団の議論と個人の振り返りを保証した ワークショップ型授業研究の実践

久保田 善彦*, 舟生 日出男**, 鈴木 栄幸***

Practice of Workshop-type Lesson Study to Guarantee “Discussion of Small Groups” and “Reflection of Individuals”

Yoshihiko KUBOTA*, Hideo FUNAOI**, Hideyuki SUZUKI***

1. はじめに

教師は、授業を学校の同僚たちと見せ合い、議論するといった授業研究によって専門職の力量を向上させている⁽¹⁾。国立政策研究所の「校内研究等の実施状況に関する調査」によれば、校内研修において、授業を複数の教師で参観し、その後に批評などの機会を設けているのは、小学校99.3%、中学校93.5%である。さらに、72.1%の小学校は、全教員が授業公開を行っている⁽²⁾。多くの学校で授業研究が行われていることがわかる。一方で、授業研究の議論の方法に困難を感じる教員が多い⁽³⁾ことも事実である。

多くの教員が能動的に議論に参加しやすい方法⁽⁴⁾であることから、近年は、小集団で議論をするワークショップ型の授業研究が増えている⁽⁵⁾。この方法は、授業参観の気づきをカードや付箋に記し、それらの紹介や分類をしながら議論を進め、最後に大集団で交流することが多い。ワークショップは、学習者一人一人の変容をもたらすと同時に、集団での創造的な活動にもつながるという両面性を持つとされる⁽⁶⁾。しかし、ワークショップ型授業研究であっても参加者は学びの深まりを実感しにくい⁽⁷⁾との報告もある。参加者が学びの深まりを実感するためには、小集団という社会的な学びの場面だけでなく、社会的な学びを学習

者個人が内化する過程にも焦点を当てる必要があると考える。つまり、議論を小集団で活動を終えるのではなく、その後に個人で振り返り、集団の議論を再解釈する機会を保障することも必要である。そこで、本実践では、タブレット型思考支援ツール（XingBoard：略称：XB）を活用する⁽⁸⁾。XBは、小集団における議論の促進とともに、その後の個人による振り返り支援を目指している。本実践は、対象を教員養成課程の学生とし、授業研究における活動に対する意識を中心に検討した。

2. 実践の概要

2.1 実践の対象

本実践は、国立大学教員養成学部における「学習臨床学」の授業の一部として実施した。実施時期は2015年1月である。対象学生は、学部1年生5名、学部2年生22名、計27名である。対象学生は、授業参観や児童・生徒の観察の経験はあるが、教壇実習は行っていない。ただし、対象実践の前には、学習者の理解とそれを促す教師の役割に関する学修、ビデオによる授業参観などを約10時間行っている。

*宇都宮大学教育学部（Faculty of Education, Utsunomiya University）

**創価大学教育学部（Faculty of Education, Soka University）

***茨城大学人文学部（Faculty of Humanities, Ibaraki University）

受付日：2015年6月8日；再受付日：2015年10月1日；採録日：2015年11月25日